

昭和の南海地震体験談

氏名: 脇 浅明 (わき あさあき)

生年月日: 大正6年4月11日

地震を体験した場所: 下津町、自宅寝室

当時の家族状況: 妻



1) 地震発生時の状況

当時29歳で、2階建ての自宅の1階部分寝室で就寝中、揺れて目が覚めた。時間的に長かったように思うが、物が倒れたり、瓦が落ちたりの被害は無かった。地区内でも同様に被害は無かった。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まった後、近くの広場に行った。「大きな地震やったなあ」と集まっていた5~6人で話をしていた。近所に住んでいた兄も加わり、「去年串本にいた時に地震あって、津波みたいなの来たぞ」と言ったのを聞いた。当時は地震＝津波の認識は無かったが、とても印象に残り、自宅に戻って飯ごうに米を入れ、雨合羽と冬の外套をひとまとめにし、妻と2人分を上がり口に置いておいた。

当時、船の製作や修理を営んでいた為、自宅が道路を挟んで海、という場所に建っており、正面が船を着水させる場所で、船が1隻上げられていて気になったので、その場所に石油缶を置いた。着水させる為の場所なので、道路の高さから海面に向かって下り坂になっていて、最初は海水面より、1mの所。しばらくすると缶が海水で濡れてきたので、また1m離して置いた。その繰り返しを2、3回すると、道路の高さになったので、津波が来ると思い、妻と2人でまとめた荷物を持ち、裏の山に走って避難した。早く気付いたので、濡れることなく避難できた。

山の際、坂になった道で水の様子を見ていた。暫く減ったり増えたりを繰り返した後、ズーッと引き出したので、着水場に置いていた船が流れて自宅

にぶつかっているかも知れないと心配になり、自宅に戻った。中に入ってみると、1階部分のふすまが10cm程度濡れていた為、1階の物を2階に運び上げ、畳をめくって立てかけておいた。その後、海の様子を見に表に出ると、沖の方500mは海水が無く、底が見えた。よほどの勢いで水が引いたのか、海底に血管のような、ミミズの跡のような筋が無数についているのをはっきり見た。



当時、自宅の斜め向かいに2階建ての社宅があり、住人の1人がその屋根に登って避難しており、「また来たぞお！津波が来たぞお！」と知らせてくれたので沖の方を見ると、大きな壁がこちらに押し寄せて来るように見え、再び山へ避難した。バリバリと物の壊れるような音がした。

3) 家族の行動・被害

避難の準備をし、妻と一緒に避難した。地震による家屋被害は無かったが、津波により1階床上1m80cmまで浸水した。引き潮時に開き扉が開いてしまい物が流されたが、一部は近くに流れ着いていた。前に置かれた船は、左方向に流され、橋の手前で止まっていた。

4) 集落・周囲の被害

海沿いの家屋は1階部分が浸水した。川は上流まで波が上がったと聞く。人的被害は無し。近所のお年よりが逃げ遅れ、寝室で寝たまま、畳ごと浮き沈みした。地震での被害は無し。

5) 地震・津波後の生活

結婚したばかりで家財道具が少なく、ある程度の準備ができていた為、被害は小さかった。午前中に津波は収まり、片付けに取りかかった。畳を乾かすのが大変だった。1ヶ月間程度は毎日干していたと思う。それから使用した。井戸に海水が入り込み使えなくなったので、新しい井戸を掘ったが、塩水が出るようになり、山の方の井戸を使わせてもらった。海沿いでは同様の家が多く、水では大変苦労した。津波被害の調査があり、床上5尺以上だと外套を2着という配給があった。元の生活に戻ったのは1年後くらいだった。

6) 次の災害への備え

自宅を建て替えた時に地上げした。同じ災害になるとは限らない。